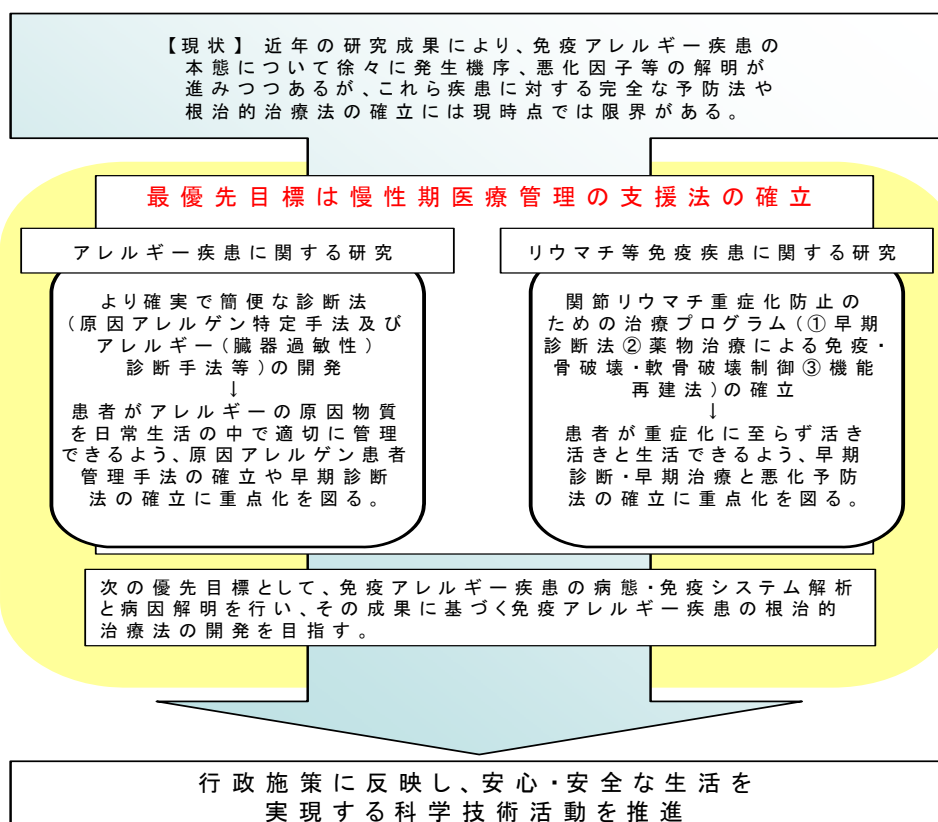


標として、①有効な治療法の選択や②早期診断、早期治療のための研究、③免疫アレルギー疾患を自己管理可能とするための研究を重点的に実施している。①については、リウマチ患者を長期に追跡することにより、生物学的製剤による治療の効果や有害事象の危険因子などを明らかにすることで、有効な治療法の選択を可能にする研究を実施している。②については、早期リウマチの実態把握、リウマチやアレルギー疾患の早期診断基準の作成等により、関節破壊が起こる前の関節リウマチ等に対し、早期の治療を可能にするための研究を行っている。また、③については、疾患の自己管理マニュアルを作成するなど、患者への普及啓発を見据えた研究を実施している。

更に、長期的な課題としては免疫アレルギー疾患の根本治療を目指す研究を進めてゆくべきとされており、そのための病態の解明や治療法の開発等にも積極的に取り組んでいる。

⑤課題と今後の方向性



このほか、総合科学技術会議における評価を踏まえ、

- ・ (独)国立病院機構相模原病院と、(独)理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センターとの共同研究を推進するとともに、研究事業の評価委員として理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター長の参画を受け、連携の強化と、研究課題の評価システムの充実を図っている。
- ・ 平成18年度から、プロジェクト提案型研究を実施し、研究者との綿密な対話に基づく計画立案と研究実施を推進している。

⑥研究事業の総合評価

花粉症、食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、リウマチ等の免疫アレルギー疾患を有する患者は国民の 30%以上に上り、ますます増加傾向にあるといわれている。また、一般的に免疫アレルギー疾患の病態は十分に解明されたとは言えず、根治的な治療法が確立されていないため、長期的に生活の質（Quality of Life: QOL）の低下を招き、一部のアレルギー疾患については不適切な治療等の結果により致命的な予後をもたらす等、疾患毎に様々な問題を抱えている。このような国民病である免疫アレルギー疾患に関して患者 QOL 等の実態を把握するとともに、予防・診断・治療に関する新規技術等の開発を進め、その成果を臨床現場に還元し、患者の QOL の向上を図ることは非常に重要で着実に実施すべきテーマである。

アレルゲンの同定のための食物負荷試験の標準的な実施方法を確立し実施医療機関のネットワークを構築したほか、関節リウマチの早期診断指標の有効性を明らかにし早期治療につなげたことなど、臨床に応用できる研究成果が得られている。

また、アレルギーの各疾患の診療ガイドラインの作成と普及に取り組んできたが、最近 10 年間で喘息の死亡者数が半減するなど、医療の質の向上と国民の健康指標の向上にもつながっている。

特にさらに、平成 18 年度はリウマチ・アレルギー対策委員会において平成 17 年 10 月に取りまとめられた報告に基づいた課題にとりくみ、具体的な臨床現場への還元・応用が進められたことは特記すべき点である。

12. こころの健康科学研究事業

<p>研究事業 : ころの健康科学研究事業</p>
<p>所管課 精神分野 社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課 神経分野 健康局疾病対策課</p>
<p>① 研究事業の目的</p> <p>わが国の精神疾患患者数は300万人を超え、また年間の自殺死亡者は約3万人で推移している。また、思春期のひきこもり、問題行動など、心の問題と関連する社会問題もクローズアップされている。このように、「精神疾患」は、統合失調症等はもちろんのこと、うつ病、神経症、ストレス性障害、発達障害等、非常に広範かつ深刻な問題にまで及んでいる。これらの問題の特性として、遺伝子解析・分子機構解明・画像解析等による脳内機構解明から、表現される行動面の評価、福祉を含む社会システムとの関連、倫理や人権上の問題までも含む多角的、重層的な視野での取組みが不可欠となってきた。</p> <p>これらのことから、「精神疾患」に対する予防、診断、治療法の開発や疫学調査などについて、行政において戦略的、主体的に進めることが必要である。</p> <p>また、筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、免疫性神経疾患等の神経・筋疾患に対して、心理・社会学的方法、分子生物学的手法、画像診断技術等を活用し、病因・病態の解明、効果的な予防、診断、治療法等の研究・開発を推進する。</p>
<p>② 課題採択・資金配分の全般的状況 (精神分野)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心神喪失者等医療観察法における運用状況の分析を含め、今後のより適切な運用及び医療の実施に資する研究 ・統合失調症、うつ病その他各種精神疾患について、現に明らかとなっているエビデンスに立脚しまたはその批判的吟味を行い、わが国で新たに採用及び普及可能な治療技法の開発を行う研究 ・従来及び今日における精神科診断学を考察し、客観的かつ科学的な精神科診断技法及びその習得方法についての研究 ・精神保健に関する日豪共同研究の第3フェーズを推進する研究 ・精神保健医療福祉の改革ビジョン」に示された達成目標の実現に向け、国民意識の変革や、精神保健医療福祉体系の再編といった国家的な課題について、精神保健医療福祉の現状を把握し、改革ビジョンの目標に関する進捗状況を把握する研究 ・高次脳機能障害者の効果的・効率的な地域生活支援を行うため、既存の社会資源を活用したネットワークの構築や具体的支援手法の開発に関する研究 ・自殺未遂者のケア・遺族や友人など自殺者の周囲の人のケアに関する現状と課題を分析し、支援方策について研究し、行政とNPO等民間団体との支援連携方法を研究する。 ・特定の精神疾患について、ヒトを対象として遺伝・脳画像・分子生物学的解析等を行い、その病態を明らかにする研究

(神経・筋疾患分野)

- ・ 遺伝的背景など内的要因、感染・免疫や酸化ストレスなど外的要因の両面から、ニューロパチーの原因を特定するとともに、発症機序を解明し、もって予防や治療への展望を広げる研究
- ・ 筋ジストロフィーの中でも研究が遅れている肢帯型につき、症例を集積することにより原因遺伝子同定やその発症機序の解明を効果的に進める研究
- ・ 大脳白質病変の原因が血管障害から遺伝性のものまで、きわめて多彩であることに鑑み、この病態の理解とその予防に資する研究
- ・ 神経疾患あるいは筋疾患に対する画期的治療法の開発に関する研究
- ・ 自己抗体が関係する神経・筋疾患の病態を惹起する機序等を究明する研究

③研究成果及びその他の効果

(精神分野)

- ・ 心の健康についての疫学調査に関する研究
WHO 調査の一環として、わが国の地域住民におけるうつ病等の頻度、相互関係、相談・受診状況等が明らかになった。
- ・ パニック障害の治療法の最適化と治療ガイドラインの策定
パニック障害の治療の実態把握により現状の問題点が明確化され、それに基づいたガイドラインが作成された。
- ・ 双生児法による精神疾患の病態解明
成因として遺伝要素が関与するとされる精神疾患について、遺伝学的検討を行うことにより、他の疾患と比較して立ち後れている精神疾患の原因解明の進歩に繋がった。
- ・ 発達障害等の実態把握と効果的な発達支援手法の開発に関する研究
脳画像評価により、発達障害の病態解明と客観的な診断方法を得るための基礎的データが得られた。
- ・ 犯罪被害者の精神健康の状況とその回復に関する研究
犯罪被害者基本法に基づいた犯罪被害者の精神健康の実態把握に関する研究であり、今後の政策を検討するための基礎データが得られた。
- ・ 重症ストレス障害の精神的影響ならびに急性期の治療介入に関する追跡研究
PTSD の予後等のデータが得られ、災害時等における心のケアの必要性が明確化された。
- ・ 精神療法の実施方法と有効性に関する研究
これまで日本においてはエビデンスに乏しかった精神療法の有効性についての客観的データが得られ、それを普及するためのガイドラインが作成された。
- ・ 自殺対策のための戦略研究
地域における自殺率が 20%減少する介入方法と、うつによる自殺未遂

者の再発率が 30%減少する介入方法の研究を行い、自殺対策に向けた政策の具体的手法を提案した。

(神経分野)

- ・ HTLV-1 プロテアーゼ阻害剤による HAM 治療法の開発ならびに HAM 発症予防に関する研究

アスパラギン酸化合物より HTLV-1 特異的プロテアーゼ阻害剤のスクリーニングを行い、更に構造の分子モデリングを通じて分子の一部の構造変換を行い、強い酵素阻害活性を持つ物質を得た。また、HTLV-1 蛋白が産生されたときのみルシフェラーゼを産生する細胞培養システムを樹立し、ウイルス感染価定量法を開発した。HAM 疾患モデルとして HAM 発症感受性ラットを樹立し、発症機序の解析を行った。

- ・ デュシェンヌ型筋ジストロフィーのアンチセンス治療法の開発

デュシェンヌ型筋ジストロフィーの治療として、ジストロフィン遺伝子のエクソン 20 を欠失した DMD 患者にエクソン 19 のスキッピングを誘導するアンチセンスオリゴヌクレオチドを点滴静注する治療を行い、エクソン 19 のスキッピングを有効に誘導すると共に、ジストロフィンの発現を確認した。

- ・ プリオン病の画期的治療法に関する臨床研究と基礎研究

プリオン病の日本初の画期的治療法であるペントサンポリサルフェート脳室内持続投与療法 (PPS 療法) をプリオン病患者に実施し、安全に治療を施行したが、治療効果についてはさらなる検討が必要である。プリオン感染干渉現象を培養細胞で再現し、治療法に結びつく可能性のある成果を得た。

- ・ 骨髄間質細胞からの神経並びに筋細胞の選択的誘導とパーキンソン病・筋ジストロフィーへの自家移植治療法の開発

骨髄間質細胞に vHL 遺伝子を導入すると神経細胞へ特異的に分化誘導できることを示した。また、サイトカイン刺激及び Notch 遺伝子の導入により筋芽細胞、筋衛星細胞、筋管細胞が誘導されることが分かった。

⑤課題と今後の方向性

(精神分野)

これまでの研究によって、精神疾患について効果的な取組を行うための基礎となる成果が得られており、今後とも、予防、臨床、社会復帰といった各ステージにおいて、社会的意義があると共に、学術的な評価にも耐えられるよう、研究課題の選考及び進行管理を行い、研究成果を目指す。

(神経分野)

研究によって解明された病態に基づき予防法や新しい治療の展望が開けており、神経疾患の医療の向上に資する大きな成果を挙げている。今後も脳・神経疾患についてゲノム解析や分子生物学的手法を駆使して病因、病態の解明を進める。今後は、これらの成果を再生医療や遺伝子治療にも繋げるなどして、新しい治療の開発とその臨床応用を目指している。